

ようやく自転車を買えたのは、日本からハンガリーに戻って来て数日後だった。

与那国、石垣、西表で自転車中心のトライアスロン合宿をしたものの、やはり大量の荷物を持っていて、ヨーロッパで自転車に乗るなんて無謀だ、というのがハンガリーに来る前の結論だった。

チャリダー小宮

ところが、ハンガリー/ブタペストの宿で小宮君という青年に出会ってしまった。彼は大学卒業後、4年間働いて金を溜め、現在世界中を自転車で旅しているという。確か別の日本人が、やはり自転車で世界一周をして、『やった。』という名の本を出していたわけ。ミキハウスか何かの社員で、有給休暇らしい。そんな偉大な事をするのは、日本人でその人だけと思っていたら、なんとこの小宮君もそうだった。



既に4年間。これから2年間自転車で旅をしているチャリダー小宮。ガンバレヨー。

彼は26歳の時にスタートして、かれこれ4年間世界を漕いでいる。既に5大陸を制覇していて、後は日本に帰るだけだそう。と言っても、日本に帰るのに、あと2年くらい掛かるらしい。彼のルートを聞いて、『トルコは俺も行くよ、また会えるな』と言ったら、『でも、チャリだから年末くらいっすよ』と言われてしまった。

そんな彼の姿をみて、やはりあのアドリア海沿岸だけは、私もチャリダーにならないと、と思い直したのであった。

自転車探し

今回は温泉にも行かずに、毎日ブタペストの街を練り歩き、自転車を探す。彼の様子にずっと自転車と言う訳ではないので、とにかく安いものが欲しいのだ。しっかりした自転車の中古品なんか最高である。

しかし、ハンガリーの通貨フォリントは日本円に対しさらに強くなっていて、あまり安い自転車が見当たらない。ママチャリでいいのに、売っているのは準本格派のタイプで5万円くらいのもが多い。

中古自転車も、10万円くらいのものが4万円くらいになっていて、やはり手が出ない。最近日本には、台湾やベトナムから1万円を切る自転車が入って来ているが、ヨーロッパではそうもいかないらしい。

自転車に乗ることを諦めてヨーロッパに来てしまったので付属品も持って来ていない。自転車だけでなく、手袋、チェーン、ドリンクホルダー、空気入れ、ゴム紐なども必要だ。さらに20キロ以上あるリュックを背負って漕ぐ訳に行かないので荷台に乗せるリアバックも買

わなければならない。

自転車に乗るのはアドリア海沿岸と決めている。イタリア側とクロアチア側があるが、断然クロアチア側である。だから、クロアチアに着いてから自転車を購入してもいいのだが、クロアチアの地方都市の自転車事情がよく分からない。やはり一国の首都で買う方が無難だろう。

ようやく1軒の店で、約2万円という自転車を見つけた。交渉して付属品もたくさんまけてもらった。

早速自転車でブタペストの街を疾走すると、こりゃまた気持ちいい事。歩くとただらと汗をかくほどだが、自転車だと実にすがすがしい。夏の旅には自転車!と思う。

ブタペスト駅へ

宿を出たのは朝の5時45分。夏のヨーロッパは日が昇るのも早い。まだ車も少なく、空気は爽やか。自転車は快調、もうドキドキするほど嬉しかった。

ヨーロッパは日本と違い、車が右側通行。ちょっと勝手が違うので戸惑ったりするが、走りは絶好調だぜ、と調子に乗っていたら、やっぱり道に迷った。

地元らしき人に道を聞くと、逆方向を教えられさらに迷い焦りまくったが、6時15分ようやく駅に着いた。

駅はぼろくエスカレータは無し。頑張って持ち上げて2階の駅構内に向かう。今までの荷物でさえ重たいのに、自転車がプラスされ更に重い。

ようやくたどり着くとチケット売り場が凄く混んでいることに愕然。まだ6時20分なのに。これだけ並んでいるとなると、間違えて並んだ場合には時間切れアウトになってしまう。駅係員らしき人に聞いて列に並ぶ。

なかなか進まない。イライライライラ。でも列車の時間は6時45分なので、何とか間に合うだろう。余ったフォリント通貨で朝食を買う時間もかろうじてありそうだ。

クロアチアのリエカという都市に行く列車は1日に一本なので、念には念を入れよう。並んだ列の前の女性に一応確認すると、にっこりここで良いのよと。

そして待つこと20分弱。6時38分になって自分の番が来ると、窓口の人に、

『インターナショナルは向こうよ』とあっけなく否定される。

50メートル離れたところにひっそりと1窓口開いているではないか。慌てて移動した並ぶ。

前の客がなんとクレジットカードで決済しやがった。ご丁寧にチケットは手書きだ。どんどん時間が過ぎていく。自分の番が来た時は6時42分。

もう諦めようと思ったが何とか購入。1分前になって構内を自転車で大疾走。

7番線ということだけを手がかりに列車に飛び乗ると10秒ほどでドアが閉まった。ホットした。

慌てて買ったチケットを見ると、ミミズがのた打ち回っている。たしか席の予約が必要でそれは有料だったはず。その料金が書かれていない。同時に座席も書いてない。自転車のブースがどこ

かも分からない。仕方なく自転車をデッキに置いて席に座って車掌を待つことに。

ハンガリー人の車掌

30分後に車掌がやってくる。『あの自転車はお前のか』というジェスチャー。英語が全く通じない。インターナショナルトレインのはずなのに。

車掌が大学生風の若者を連れてきた。でもこの若者もほとんど用を成さない。

結局、同僚を別の車両から連れてきた。曰く、

『この車両には自転車を積んではいけないルールになっている。自転車を運びたければ別の電車に乗りなさい。そしてその場合、12ユーロ(1600円)が必要』と。

実は切符を買う時に慌ただし中でも確認していた。自転車を乗せるけど、Extra Chargeはあるのかと。回答は『要らない』ということだった。

ヨーロッパの鉄道は当然自転車を乗せて良いものだという先入観も手伝って、難癖を付けているのかと思ったが、ルールブックまで取り出して解説し始めた。で結局金で解決することに。

こんな事もあるかと、残り少なくなっていた2800フォリント(1564円)の内、1000フォリントを隠しておいた。

例によって財布の中身を全額、小銭と共に1800フォリントを差し出すと、全然足りないという。仕方が無いので、隠しておいたなけなしの1000フォリントも、差し出す。

この勝負、負けた。

この辺りが、まだまだ腐敗している共産圏の名残である。

金で解決することに決まると、すっかり打ち解けた雰囲気になり雑談となった。

『今日はこうやってお金をもらうけども、実際に生活が苦しいんだ。共産主義から資本主義に変わって、物の値段は3倍になってしまった。ところが給料はほとんど変わらないんだ。俺のサラリーは300ユーロ』(約4万円)なんだよ』と。

『ブタペストだけは職がある。ところがブタペストに来てみても、家賃が高すぎて結局お金は貯まらない』と嘆く。

結局、2800フォリントの内、2000フォリントだけを持って行って、小銭までは取らなかった。逆の方が有り難いのに。一人1000フォリントずつ山分けってことだ。

こっちがルール違反をしているという弱みがあったものの、2000フォリント(1117円)というのはちょっと高すぎたな。

そして最後にやられた。『これで、ハンガリーの国内は大丈夫だからな』

そうなのだ。クロアチアに入ると車掌が交代するということがあったのだ。やばい。

ハンガリー~クロアチア国境で、この車掌達は意気揚々と降りていく。『Good Luck』と。きっと今夜は豪華な食事なんだろうな。

しかし、本当にこの列車に自転車を乗せてはいけない、という事だったとすると(確かにこの列車

には、自転車を置くスペースは少しもない)、今朝のギリギリ飛び乗らざるを得なかったのは、むしろ幸運だったということになる。いたずらに時間があつたら、必ず駅員に確認し、その場で拒絶されていただろう。塞翁が馬ってやつか。

クロアチア人の車掌

国境で代りに乗り込んでくる制服の男。

『この自転車、俺のなんですけど...』というと、

『うん、いいから座席に座れ』と。

おおっ、見逃してくれるのか、嬉しい、と思つたら単なるイミグレーションだった。

そして今度は本物の車掌。案の定、この電車には自転車を積めない、下りなさいと、迫ってくるクロアチアの人。

実はハンガリーでカクカクしかじか...と説明し、小銭の 800 フォリント(447 円)しかないんだとジャラジャラと差し出す。この車掌は、全く躊躇もせず受け取った。1 フォリントコインまでしっかりと。『これじゃあ、ジュースしか買えないよ』と捨てゼリフまで残す。

この野郎、ジュースなら 5 本以上買えるじゃねーか。

そしてまたしても最後にやられた。『これで、ザグレブ駅までは大丈夫だからな』と。

加えて、『でもザグレブからリエカまでは大問題だ。たいへんだよ』と脅してくれる。

クロアチア人の車掌

しかし、それは脅しでも何でもなかった。事実だったのである。

ザグレブ駅で乗り込んできた車掌には、全くネゴが通じない。そもそも英語が通じない。どうも

『この列車には自転車は駄目なんだ。駄目と言ったら駄目なんだ』の一点張りの様だ。ひげ面でブルートの様に怖い。

近くに座っていた、オリーブの様な女子大生に通訳してもらおう。やはりこの電車には積めないようだ。そしてポスタルを買って、別の列車に乗れと言っている。

そのポスタルの料金を聞くと、ルールブックを取り出し、60 クナ(1110 円)だという。そこで、用意しておいたユーロの小銭、約 4.5 ユーロ分(約 620 円)を取り出し、これで何とかしてくれ、と頼む。

しかし駄目だという。そもそもクナでないと駄目だと。

『おい、この列車はブタペストから直行だろ、クナ何て持ってないよ (本当はブタペストの宿で、クロアチアから来た若者が持っていた分を交換してあげていたので持っていた)』

『今はこの金額のユーロの小銭しか持ってない (本当はあと 45 ユーロ持っている)』

『クレジットカードでキャッシングしてるから、ドルも円も持ってない (本当は両方持っている)』

と立て続けにまくりたてる私。あまりに融通が利かないから、ハードネゴしてみることに。

居座りである。

このラウンドはジャブの応酬。

しかしそれが悪かった。次の駅に着くや、その車掌がやって来て、『さあ、ここで下りてオフィスに来い』と。

味方をしてきていた通訳の女子大生も、もうギブアップの状態。

さらに自転車を力づくで列車から降ろそうとする車掌。

しかし、あまりに偏屈なオヤジだったので、直前に自転車をがっちり列車に括り付けておいたのだった。そのおかげで、紐をほどくのにか時間が掛かり、そして案の定列車が動き出した。

よし、このラウンドは勝ったぜ。

そう思ったつかの間、今度は上司にあたるような別の車掌を呼んできた。再び事情を延々と話す事に。

『そもそもは、ハンガリーのチケット売りのおねーちゃんが悪いんだよ』と言ってみるが、

『ここはハンガリーでなくクロアチアである』と手厳しい。



簡単に降ろされない様に、立ててがっちり列車に固定した自転車。作戦勝ち

がんがん遣り合っていると、最後に、じゃあユーロ払いでいいから、8 ユーロ払え(1064 円)と妥協する上司の車掌。

『ハンガリーでも、国境のクロアチア側でも、持っているフォリントを全部出しちゃって、4.5 ユーロこれしかない。そもそも、既に払った分は8 ユーロを越えている(ここまで英語)』

『もう払ってるんだよ。さあ、これ如何に!(これ力強く日本語)』

『だいだいだよ、マルコポーロが日本に来た時にはおごってやったじゃないか、何で俺がクロアチアに来た時にはこうなんだよ(これももちろん日本語)』と言ってみると、上司の方は納得してくれたようだった。

そして最後に小銭の4.5 ユーロを差し出すと、それは受け取れないという。

旧共産圏で、初めて汚職にまみれていない役人に出会った気がして感動した。

しかし、金で何とかなる役人と、頑なな清廉役人と、地球市民としてはどちらが良いのか微妙な体験である。

クロアチアという国

ユーゴスラビアが分裂して、クロアチアという国が出来たことは知っていたが、私にとってほとんど馴染みのない国だった。

しかし前回のワールドカップサッカーの時に、『クロアチア人が間もなく訪日するのに、日本には通訳が一人もいない、という問題が持ち上がっていたが、ようやく探し出せた』という記事が新聞に載っていた事がある。その人は何と自分の会社の、一緒に飲んだことのある先輩だった。知らなかったがクロアチアへの留学経験があったのだそう。

そして昨年乗った船の船長と機関長が、何とクロアチア人だった。

そして最近知った縁がもう1つ。何と私の住んでいる川崎市と、クロアチア北部の街リエカが姉妹都市だったのである。川崎市民の何人かは、市の使節団としてこのリエカの土を踏んでいる。そして何故か昔から、【アドリア海】という響きにあこがれがあった。どんな国かは未だに分からないけど、自転車に乗るならクロアチアという妙な思いがあったのである。

- 1.面積： 5万6542km² (九州の約1.5倍)
- 2.人口： 444万人 (2001年国勢調査)
- 3.首都： ザグレブ (人口78万人) (2001年国勢調査)
- 4.言語： 公用語はクロアチア語、一部セルビア語等
- 5.宗教： カトリック、セルビア正教等
- 6.民族： クロアチア人 (89.6%)、セルビア人 (4.54%) 等
- 7.略史
7世紀頃 スラブ人が定住
10世紀前半 トミスラフ公がクロアチア王国建国
1527年 ハプスブルグ家の支配下に入る
1918年 セルビア人・クロアチア人・スロベニア人王国建国
1941年 「クロアチア独立国」樹立宣言
1945年 ユーゴ構成共和国の一つとして発足
1991年 ユーゴより独立宣言
1992年 国連加盟



リエカという街

さすが川崎市と姉妹都市というだけある。

工場の近辺は、やはり工場地帯の川崎区にそっくりだし、高級住宅地は宮前区に近い。一方通行が多くごちゃごちゃしている地区は幸区そっくりだし、新興住宅地は麻生区に似ている、イケ面が多いエリアは多摩区長尾7丁目にそっくりだ。と書いてみるが、全部嘘である。

一体なんで姉妹都市になったのか知りたいところだ。

このリエカ、たいした観光地ではないから、宿も少ない。ただ、赤十字がベッドを提供しているそう。実際に行ってみたところ、この赤十字、宿に改造してあるようだが、昔は病院の寮か何かのようだ。

赤十字といえば献血。

実は私は熱狂的な献血マニアなのである。

血がきれいでパワフルなうちに怪我・病気の人に差し上げたい、という天使の様な存在でもある。一方、売血のある国なら相当な金持ちになっているに違いない。

私の血を輸血された方は、DNA も多少伝染して放浪癖が出るかもしれないが、それはそれでよしとしたい。

昔はよかった。日赤ではコンピューター接続などされておらず、前回の献血履歴は自己申告だった。今では全国のコンピューターが繋がっていて、400 ミリリットルの献血の場合、3 ヶ月を経ないと駄目、年に3回まで、なんてルールに引っかかってしまうので実に厄介だ。せっかく献血に来ているのに、追い返されることがよくある。

でも常設されている献血センターと違って献血車の場合は、コンピューターに繋がっていない場合もあって、自己申告で献血できたりする。4 ヶ月で、合計3回1200 ミリリットル献血した時には、さすがにふらっときたもんだ。

因みに、体重を減らす為の、新しいダイエットでないことは念の為ここに書いておきたい。そして看護婦が目当てではないことも書いておきたい。いつもチェックしちゃうけど。

おっと話がそれた。そうリエカにある赤十字の話である。ヨーロッパではO型RH+なんて珍しいだろうから、ここで献血しようと思ったが、生憎やっていない様だ。仕方が無いので、逆にぐわっと赤い液体を経口接種することに。

因みにクロアチアでは、何故かワインは1リットル瓶が圧倒的に多い。種類も結構豊富。値段も1リットルが15クナ(278円)からあってリーズナブル。味も申し分ない。

リエカの街を散策。なるほどハンガリー帝国の影響を良く受けているようで、古い建物はブタペストのものにそっくりだ。

さて、そろそろ24時間もご飯を食べていない。バタバタで朝食も昼食も食べられなかった。

至るところにピザ屋があるので入ってみる。何とかピザ、何とかサラダとビールを頼む。それぞれ32ユーロ(592円)、35ユーロ(648円)、15ユーロ(278円)。んっ、元共産国にしては物価が高いぞ。中級の店なのに。

ビールグラスの上部にはうっすらと線が入っていて、0.5Lと書かれている。500ミリリットル瓶のビールをそっと注ぐと、完璧にその線に乗った。この正確さ、ドイツのビールか？



赤十字のビル。あのマークを見ると、無意識に腕をまくってしまうのは私だけではないはず(って事はないか)。



イタリアの影響を強く受けているようで、どこへいってもピザピザピザと書かれている。

日本でも最近、メニューに『生ビール大ジョッキ(700 ミリリットル)』なんて書いてあるが、確認したら嘘だったって事がある。私の経験では、3軒の店でそうだった。

その確認の方法は簡単だ。まずその大ジョッキを頼む。飲み干してから、瓶ビール大(633 ミリリットル)を頼む。で、おもむろに注ぐと、やっぱり全部入らない。700 ミリリットルなんてメニューに書いてありながら、600 ミリリットルぐらいじゃねーか。こんな不正は追求せねばならない。おい、店長出てこい。

でもこれを確認できた頃には、ほろ酔い気分になっていて、もうどうにでも良くなっていたりするのがいつものパターンである。

しかし、この事実はかなりの確率で正しい(というか表示が正しくない)ので、是非試されることをお勧めしたい。因みに生ビールより、瓶ビールの方が同じ量なら安いことが多いので、確認作業は結果としてお得である。2杯目の味はそう変らない。

ついでの話だが、瓶ビール大の633 ミリリットルという半端な数字は、外国では存在しない。これは日本の法律で、『小学生(6年間)、中学生(3年間)、高校生(3年間)は飲んじゃ駄目』と決められているからである。

食べていると、雷が鳴り、やがて豪雨となった。店のテラスには簡単な屋根があるが、雨漏りがするほどの雨。

一旦止んだが、宿に戻る時に、再び豪雨となった。もうびしょびしょ。

アドリア海の青い海、青い空のイメージが壊れつつあった。

毎日こうなのかと宿で聞くと、『イヤァ、しっかり降ったのは2ヶ月ぶりだなあ』と。とほほ...

びしょびしょの自転車をしまう時に、前輪がぐるりと回ってライトが破損した。何だこれ、構造の問題があるのでは？

昨日買ったばかりの自転車なのに。そしてこれが不具合の始まりなのであった。

つづく